ふるさかはるか

Haruka Furusaka Solo Exhibition

積層の器　ことづての声

A Vessel in Layers – The Voice of Lore

2022年11月26日［土］～12月18日［日］　13時から19時まで

＊12月10日［土］は13時から18時30分まで

水・木休廊 ／ 入場無料

助成：公益財団法人小笠原敏晶記念財団　　協力：有限会社修美社

ギャラリー・パルク

《ことづての声》部分
2020
藍 土 紙　ドローイング
1120x870mm

Gallery PARC

GRAND MARBLE

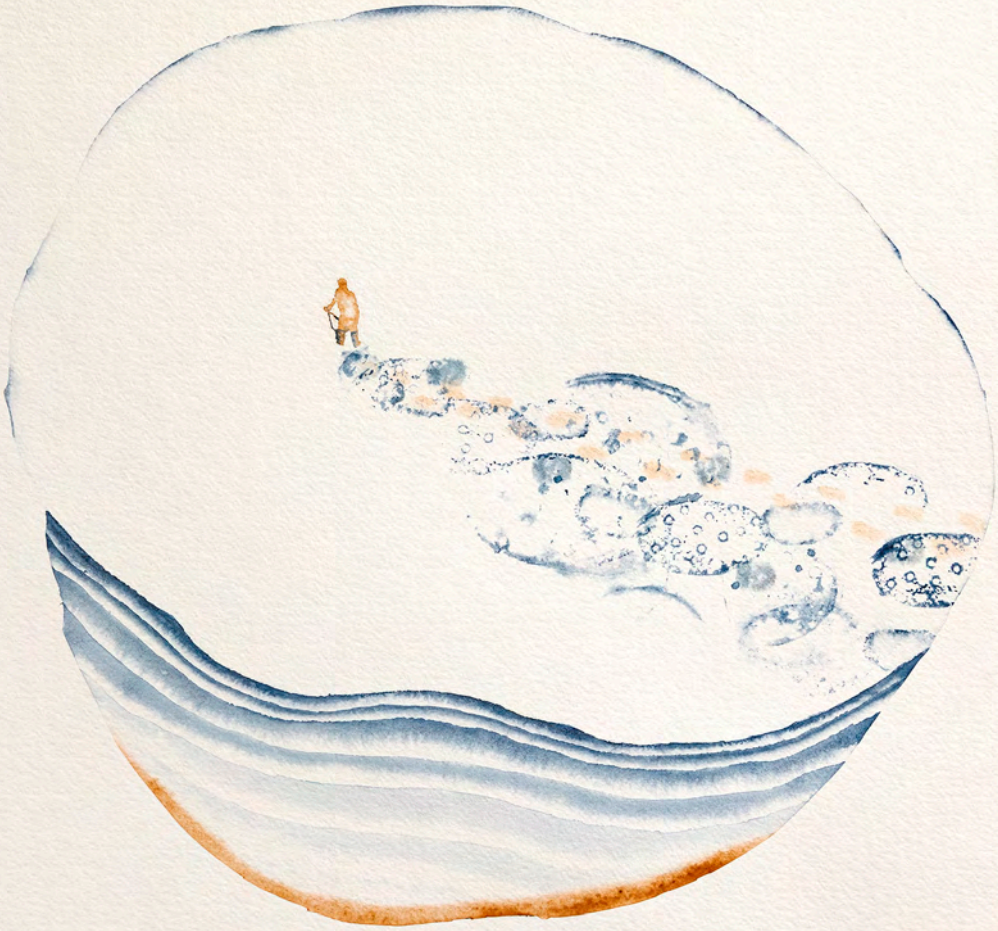
Press Release:2022.11.13

ふるさかはるか

Haruka Furusaka Solo Exhibition

積層の器　ことづての声

A Vessel in Layers − The Voice of Lore



《積層の器》部分
2020
藍土紙　ドローイング
1120x870mm

Gallery PARC［グランマーブル ギャラリー・パルク］では、2022年11月26日から12月18日まで、木版画家・ふるさかはるかの個展「積層の器　ことづての声」を開催いたします。

『絵具や木、紙や道具に至るまで、その土地の気候や環境と密接に関わる木版画はその風土を映し出す』。

ふるさかは1999年武蔵野美術大学油絵学科卒業後、2002年よりフィンランド、ノルウェーなどでのレジデンス・発表をはじめ、様々な土地を訪れるなかでその地の暮らしや風土を知り、そこを端緒に木版画を制作しています。

木や土など、その土地の自然素材を得て制作するふるさかの版画はまた、そのプロセスにおいて素材から自然や暮らしを汲み取る行為でもあるといえ、近年では「自然と共に生きる人びとの言葉や手仕事」を眼差し、自身の手仕事（版画制作）や他者の手仕事を通じて「人が自然から何を読み取り、協調しているのか」について知り・確かめる行為として、取材から木版画制作に取り組んでいます。

2017年よりふるさかは津軽・南部地方で、山の人びととその手仕事を取材し、彼らの何気ない言葉を題材に作品を制作しています。また2023年にはこれまでの取材・作品をまとめた『本』の出版を計画し、現在も精力的に取材・制作を続けています。この一連の取材においてふるさかは、彼らの「山の命との向き合い方」に眼差しを向け、彼らが自然とどのように向き合い、何を読み取り、それが手仕事にどのように表れているのかについて、伝承されてきた創意工夫、人と自然の関係性への洞察が含まれる言葉を取り上げます。そして、それらの言葉をもとに、彼らの手仕事を自らの手で理解しようと、土を拾い藍を育てて絵具を作り、木片の形に導かれながら自然の色・形と呼応するように版木を彫り、作品をつくります。

本展「積層の器　ことづての声」は、ふるさかがこれまでの取材の中で触れてきた・得てきた言葉やものとともに、土と藍の絵具で描いたドローイングや木版画作品、ピンホール写真、作品未満の素材などをあわせて展示いたします。ここでは、取材を通して得てきた「自然と人間との関わりのあり様」について、知識や言葉における理解から、自らの手を動かすことによる「共感」へと転換する、ふるさかの「手を動かし、知る」の手つきを体感いただけるのではないでしょうか。

会期中には、本展や展示作品・資料などについて、作家が簡単に解説する【ギャラリーツアー】、津軽・南部地方での取材の様子をスライドを交えながらお話しいただく【アーティストトーク】、翌年に出版予定の『本』づくりに向けた試作作業をご覧いただける【公開制作】などを開催いたします。

Gallery PARC

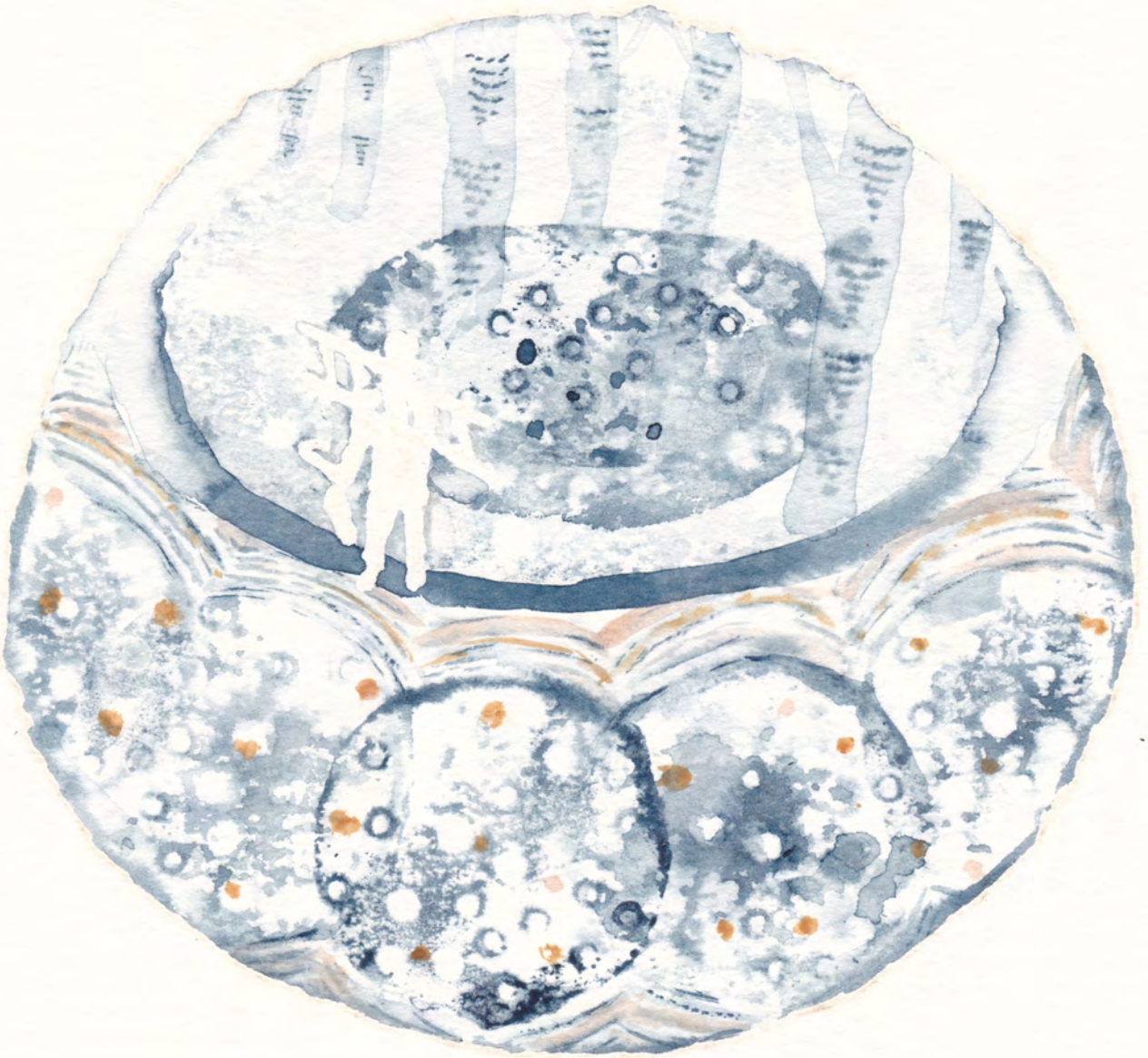
GRAND MARBLE

Press Release:2022.11.14

ふるさかはるか
Haruka Furusaka Solo Exhibition

積層の器 ことづての声

A Vessel in Layers − The Voice of Lore



出展作家 **ふるさかはるか**

展覧会名 **積層の器　ことづての声**

会　　期 **2022年11月26日[土]～12月18日[日]　13時から19時まで　＊12月10日[土]は13時から18時30分まで**
水・木休廊 ／ 入場無料

助　　成 **公益財団法人小笠原敏晶記念財団**　　協　　力 **有限会社修美社**

関連企画 **【ギャラリートーク】 11月27日[日] 14時～　参加無料・予約不要**
本展覧会や作品などについて、作家によるギャラリーツアーです。

【公開制作】 12月4日[日]・18日[日] 13時～16時
2023年に出版を予定している「本」づくりに向けた実験作業の一環として、藍と漆を使った木版刷りの試作の様子をご覧いただけます。
※会場で漆を使用する可能性があるため、漆かぶれに敏感な方はご考慮ください。

【アーティストトーク】 12月10日[土] 19時～20時　入場料1000円　定員20名（予約優先）
津軽・南部地方での取材の様子をスライドを交えながらお話しします。
※予約・詳細はギャラリー・パルクWebサイト（www.galleryparc.com）にて

会場・主催・お問い合わせ

ギャラリー・パルク
602-8242 京都府京都市上京区皀莢町 287 堀川新文化ビルヂング 2 階
075-334-5085 / info@galleryparc.com / www.galleryparc.com　MAP

[アクセス] ○ 地下鉄烏丸線「丸太町」・「今出川」駅より徒歩約20分 ○ 地下鉄東西線「二条城前」駅より徒歩約18分 ○ 京都市バス9番・50番（JR京都駅から約22分）・12番（阪急烏丸駅から約15分）・67番（阪急大宮駅から約12分）系統「堀川中立売」バス停下車徒歩1分 ○ 駐輪場・駐車場 有 ※満車の場合は近隣のコインパーキングをご利用ください。

Gallery PARC

GRAND MARBLE

Press Release:2022.11.14

ふるさかはるか

Haruka Furusaka Solo Exhibition

積層の器 ことづての声

A Vessel in Layers − The Voice of Lore

「サーミの人たちは、いつも漁労や狩猟やトナカイの世話をすることで生活していた。だから彼らにとって前に進みながら知識を得るということは、第二の天性だった。動くことによって知るのではなく、動くことこそが知ることなのだ。」
社会人類学者のティム・インゴルドは、フィールドワークにおいてあるべき姿勢をサーミの生き方になぞらえてこう語った。*

美術家にとってのフィールドワークの意義は、事実の裏付けをとって調査論文を書くことにあるのではなく、体験したことを自らの表現手段になぞらえて、論理的な説明が難しい方法で表現し伝えることにある。作品作りの手を動かすことによって知ることは、インゴルドのいう「動きながら知る」ことに等しい。
そのように作品制作に備わったフィールドワークの要素をあぶり出すため、私は同じく自然の中で「手を動かし知る」ことを営んできた人びとの言葉と共感を求めて取材する。（ふるさかはるか）

*『メイキング』ティム・インゴルド 著 , 金子遊 水野友美子 小林耕二 訳 , 左右社 , 2017

ふるさかはるか（木版画家）

土と藍から自作した絵具と、版木の持つ自然な色・形に着目した木版画を作る。ノルウェーなど北国での滞在制作・発表のかたわら各地の山の手仕事を訪ね、近年では自然と共に生きる人びとの言葉や手仕事をテーマにした作品に取り組んでいる。展覧会『トナカイ山のドゥオッジ』では、北欧の先住民族サーミの人びとを取材した木版画シリーズを発表。2017 年国際芸術センター青森での展覧会『土のことづて』を機に青森での取材を重ねてきた。2010 年「木版画アトリエ空中山荘」を立ち上げ、美術館等でのワークショップを通して手仕事と絵画の要素をあわせ持つ木版画の魅力を伝える取り組みも行っている。

harukafurusaka.net | kucyusansou.com

About

手仕事について人と話せば、作り方や材料、風土の事、誰に教わり、作った物をどう捉えるか、そんな話になる。土や木を加工する手仕事めいた木版画をする私にとって、手を動かし思考する言葉は共感や手掛かりを与えてくれる。そして話し手の声から、積み重ねてきた創意工夫や伝わってきた誰かの言葉が推察され、個人の歩んだ事実という支流が、源の知れないことづての底流に続いているように思えるのである。（エッセイ『積層の器 ことづての声』より）

2017 年から津軽・南部地方で山の手仕事を取材してきた。マタギで木地師の山中泰彦さんからは、今では知られなくなったソマの暮らしについてたくさん話を聞かせていただいた。山中さんの作る「山の命を止めて食う器」のこと、ソマ［ 杣（夫）=木こり ］だった祖父が自作の笛に自ら掻いた漆を塗り、岩木山神社の山神に笛の音を奉納したこと。その漆塗りの笛が山に生きる人びとの心象を表しているような気がして、漆と人との対話を求めて漆掻きの盛んな南部地方へと取材の足を伸ばした。漆掻き職人で塗師の鈴木健司さんからは、漆の木が樹液をよく出すように「木をこさえる」こと、木から読み取るサインを教わった。漆掻き道具を作る数少ない鍛冶屋の中畑文利さんからは、木と人をつなぐ道具の仕立てのこと、漆掻きが社会や自然環境の変化からどう影響を受けてきたのかを聞かせていただいた。

そして彼らの言葉をもとに、私も自然の色・形と呼応するように作品を作る。手仕事を手で理解しようと土を拾い藍を育てて絵具を作り、絵を描き版木を彫る。素材から作品へとうつろう制作途上のものと手ぶりを、そのままここに配置した。今、これらの取材と作品をまとめた本の制作も途上にある。来年出来上がるその本の伏線をここに散りばめ、もう一度それらを拾い直しているところだ。（ふるさかはるか）